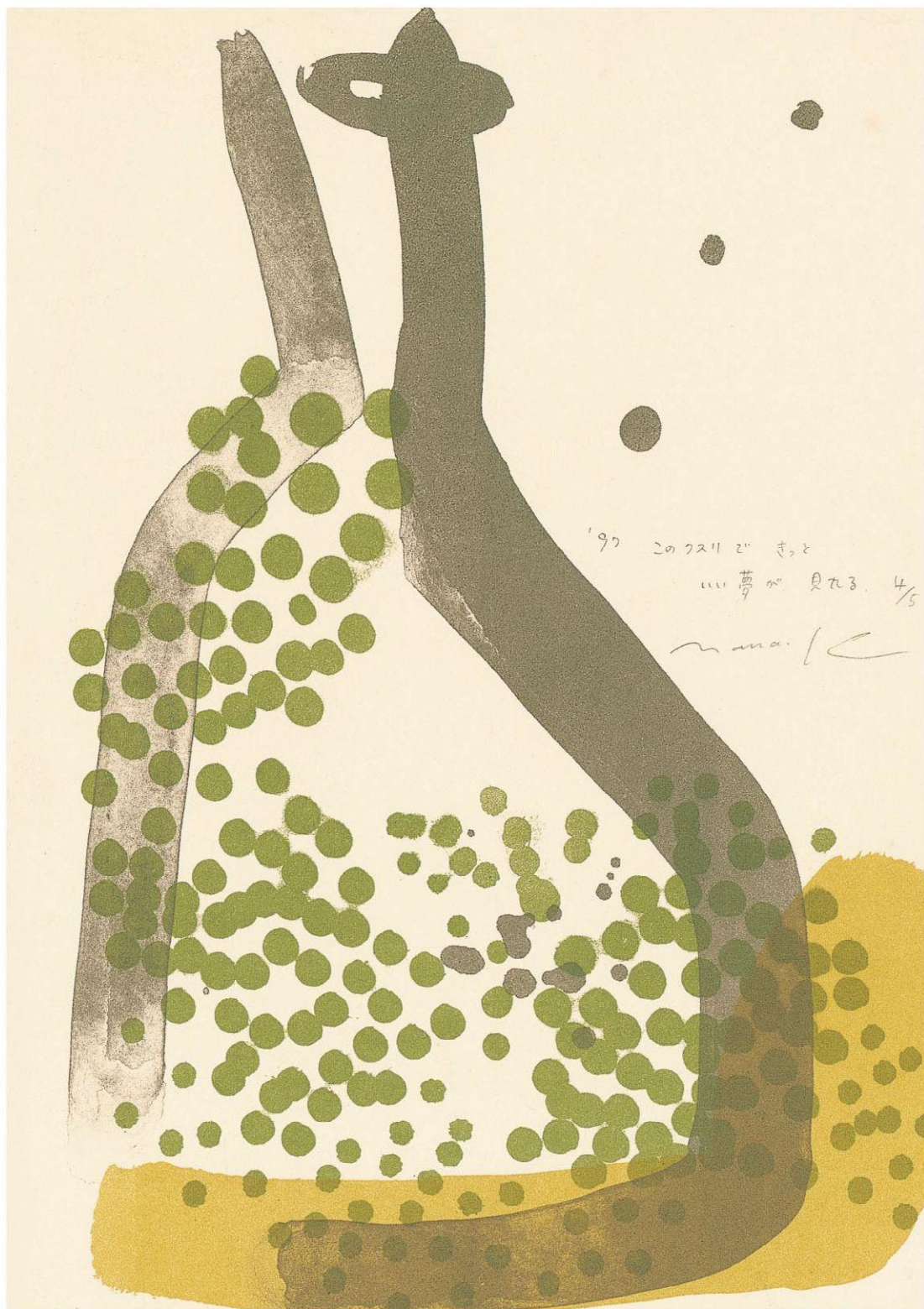
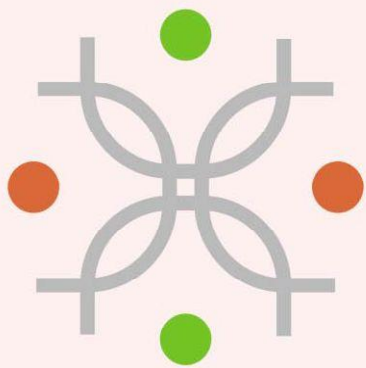


熊大通信

特集

地域課題解決と大学の役割





Upgrade Unique Union Universal
KU4U

熊本大学の約束(KU4U)

Kumamoto University For You

私たちは、熊本大学を
開かれた心地よい環境の大学として、次の4つのことに全力を投入します。

Upgrade

未来を生き抜くプロフェッショナルの養成

Union

地域連携と社会貢献

Unique

新たな知的価値の創造

Universal

留学生教育と国際貢献

C O N T E N T S

1 知と社会 Vol.18
5 地域課題解決と大学の役割

6 夢の実現 Act.6
ゼロから創り出す
芸術の魅力

7 熊本大学教育学部 助教授 国枝 春恵

8 熊大群像
感動を伝える手話

—コミュニケーションを大切に—

9 熊本大学自然科学系事務部 大学院教務企画係長 森 保夫

10 卒業生を訪ねて
大学時代に培ったチャレンジ精神で
新製品の開発を実現

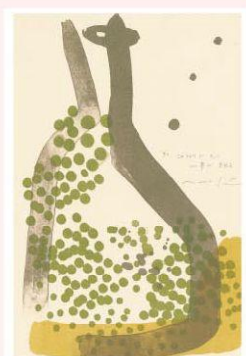
11 リハテーブ製薬株式会社 技術開発部 戸畑 温子さん

12 国際交流
シリーズ 国際交流協定校紹介
～アメリカ・ジャクソン研究所/生命資源研究支援センター～
13 「世界の頂点」と築いた
パートナーシップ

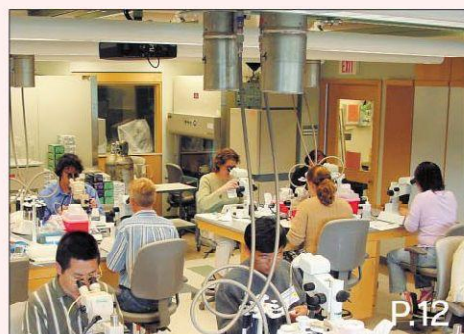
14 熊大INFORMATION

お薦めの一冊 熊本大学法学部教授 森 光昭

17 熊本新哲学の道 熊本大学法学部教授 岩岡 中正



表紙/クロスリボン (リトグラフ246×170mm) 1997
作/川田 なな
作者プロフィール/(1975-2001年)熊本県天水町生まれ。大胆なデフォルメと繊細な色使いが魅力の画家。学生時代に全国大学版画展で優秀賞を受賞するなど、将来を囑望されていました。本人が好きだった美家のみかん山に「なな、みかんギャラリー」がオープン。



地域課題解決と 大学の役割

熊本大学は新しい時代の国立大学の社会的使命として、大学の持つ知的・人的・物的資源を結集し、教育や研究成果を社会技術の提供や政策の提言という形で、地域社会に還元することを目指している。

もちろん、これまで熊本大学は、各部局や個々の研究者のレベルで、こうした地域の課題について取り組みを行ってきたおり、特に、平成十四年度から始めた地域貢献特別支援事業では、大学の持つ「知」を地域へ還元する試みで、成果を上げてきた。

このような実績と地域からの要請を踏まえ、本格的にこの新しい大学のミッションに取り組むために、今年四月、全国の国立大学に先駆けて、シンクタンク機能を持つ「熊本大学政策創造研究センター」を設立した。地域社会の一員として、地域のさまざまな課題を解決するために、学際的でより実践的な取り組みを始めた熊本大学。今回は、熊本大学が地域の課題にどう貢献しようとしているのかに焦点を当てる。



新しい大学のミッション

熊本大学は今年四月に政策創造研究センターを設立し、地域の課題や政策の提言を行う体制を充実させた。また、この取り組みには、センターの三人の研究だけではなく、学内外のさらに幅広い研究者を集めたプロジェクトも動き始めている。

初代センター長となった小野友道熊本大学理事・副学長は、「大学がこのようなシンクタンク機能を持った共同研究施設を整えた例は全国でも少なく、各方面から注目されています。陣容はまだ少ないのですが、本学には千人を超える研究者がおり、より充実した研究と教育を通して、熊本大学ならではの地域貢献ができるかと確信しています」と抱負を語る。

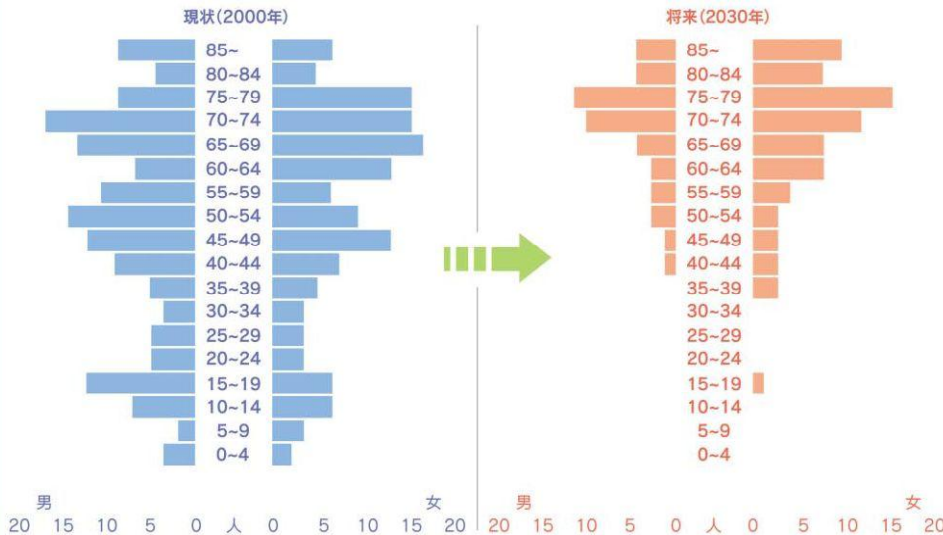
「今回三名の研究者を全学から



小野友道センター長・理事・副学長
熊本大学ならではの、地域貢献をしていきたい

集落から人がいなくなる

芦北(吉尾・大岩2・上原地区)の将来の姿
2000年→2030年



このままでは地域がなくなってしまう

「少子高齢化による地域の疲弊、

公募して配置しました。第一期のこのセンターのテーマは、「持続可能な地域社会の創造」のための政策研究としております。」

とりわけ中山間地域の過疎化や少子高齢化は深刻な状況です。このままでは地域がなくなってしまう。そんな切実な危機感を共有した私たち研究者と行政関係者がともに地域に飛び込んだ。それが、水保・芦北地域総合政策研究でした」という上野真也助教授。



都市住民と地域住民の交流事業、山焼きとソバ畑づくり
(芦北町上原地区)

平成十三年から熊本県や芦北町と熊本大学が協働して、過疎化や少子高齢化が進む地域の公共政策のあり方を研究してきた。熊本大学からは上野助教授のほか、山中進大学院社会学部教授、岩岡中正法、地域の歴史や産業、社会の実態、価値観の変化などを調査・検証し、それらを基に政策の提言を行った。

上野真也助教授(政治学)

研究者と行政、住民が問題を共有して、地域政策研究に取り組みたい



人と人をつなぐ学問の蓄積を地域へ

山間地域の調査では、人口減少によるコミュニティ存亡の危機、全国平均よりも低い収入など、極めて厳しい状況があるものの、住民の連帯感や信頼感、社会・政治参加などが強い地域には、「ソーシャル・キャピタル」と呼ぶ地域ネットワークの力が認められた。このため、上野助教からは地域政策の中で、ソーシャル・キャピタルを積極的に活用することを提案している。

「今回、私たち研究者も研究論文をまとめて終わり、ではなく、地域のために継続して何かしよう」と真剣に取り組み、それが地域の人にも伝わった。社会科学はもともと人と人をつなぐ学問ですが、今回はその特性が活かされ、研究者や行政の実務家、地域住民との間で信頼関係を築くことができ、少しずつですが、成果が出てきています」と上野助教。

研究者になる前には行政機関で働いた経験を持つ上野助教だけに、地域社会に対する思いは人一倍強い。



柿本竜治助教(土木計画学)
経済と工学、ふたつの面から解決策を提案します

そんな上野助教が「地域社会の維持や再構築のために、学問分野を異にする研究者とこれから一緒に研究を進められると思う」と、わくわくした気分になります」と話すのが、次に紹介する柿本竜治助教や魏長年助教らの研究だ。

過疎化が進む地域の公共交通をどうするか

「過疎地域のバス路線は赤字続きで、補助金がなければ運行はできません。平成十四年には、法の改正で路線ごとに補助金が出されるようになりました。そこで経営評価の手法を用い、バス路線ごとの生産性や集客性、公共性など指標化し、さらに路線の改善点を抽出して提案しました」と話す柿本竜治助教。

同助教が専門とする土木計画学では、このような公共交通のほか、道路や橋、土地利用など

社会基盤整備効果の評価を扱う。社会基盤の整備には賛否両論、また総論賛成・各論反対といった論議が持ち上がることが多い。その背景には、環境に与える負荷への危惧、利権、土地への愛着など、さまざまな思いが絡み合っており、感情的な対立を生むことさえある。柿本助教の研究は、そんな状況に風穴を開けたり、対立が深

まる前に客観的な指標を示して双方の譲歩を引き出したり、いわば「合意形成」に役立つものである。

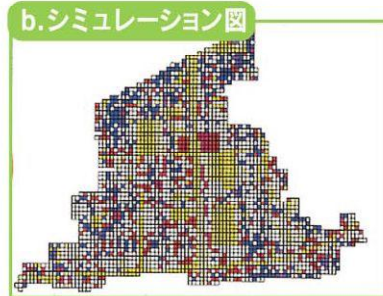
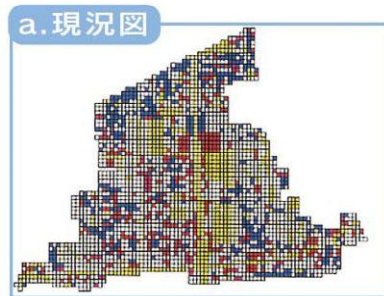
より摩擦の少ない解決策を提案

「地域の生活の場を整備していくには、相応の技術とそのため

柿本教授が開発中の土地利用シミュレーションモデルの一例

凡例

□：空地 ■：住宅 ■：商業 ■：道路・公園など



aは、1998年の熊本市の新市街地の土地利用状況を示す現況図。
bは、1990年を基準年としてシミュレーションした8年後の土地利用シミュレーション図。

bは、aの現況をほぼ再現しており、このモデルを使うと土地利用の予測ができる。具体的には、行政による住宅の先行整備などにおいて、規制と誘導の効果をシミュレーションすることにより、計画している施策の有効性を事前に判断できると考えられる。



魏長年助教授(社会医学・運動生理学)
これからは、「健康を自分で
つくる」時代です

生命科学分野の、魏長年助教授が専門とするヘルスプロモーション

高齢化が進む地域の健康づくりを支援

真に住民に利益をもたらす社会基盤整備のための、大切な「数字」。柿本助教授の研究は地域で活かされ、そして地域が活きていく。

うか。その価値はどう評価できるのか。対案の価値・評価も含めて、具体的に説得力を持った数値を示します」という柿本助教授。「右手にエンジン、左手にエコノミストの旗」を自称するだけに、綿密な試算を行った上で分かりやすいモデルやシミュレーションを構築。工学的見地から将来予測を立てるだけでなく、費用や外部経済効果など経済学的な数値や指標も提示して、「できるだけ摩擦が少ない解決方法を提案するようにしています」。



上海市でのヘルスプロモーション活動では、グランドゴルフの取り組みが始まった。

もまた、熊本大学が高齢化の進む地域社会へ貢献できる研究分野として注目されている。ヘルスプロモーションとは、WHO(世界保健機関)の定義によれば「人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようになるプロセス」(オタワ憲章・1986)のこと。「健康を自分でつくる」21世紀の健康戦略である。

ヘルスサービスは従来の「専門家を中心とした病気の治療と予防」から「生活者が主体となって、健康をつくる」に変わります」と魏助教授は話す。「目標は、住民一人ひとりの生活の質を高め、健康で満足できる社会づくりであり、ヘルスプロモーションはその目標達成の技術である。その技術を用いて持続可能な地域社会を創造できると思います」。

そして「地域」はよりグローバルに

住民を主体とした健康づくり活動を進めるため、魏助教授らはさまざまな自治体と協力している。例えば植木町の「国保ヘルスアップ事業」では、5カ月間生活習慣改善を体験した住民対象者がグループワークによりその感想を話し合ったり、水中運動を体験したりして、健康づくりを習慣化させる研究に取り組んでいる。「健康の概念は一人ひとり、違う。例えば、寝たきりのお年寄りにとつては、毎日孫の声を聞くことが「健康」の証だったりする」。パーソナルなものだからこそ、一人ひとりの意志が大切になる。



鎌水洋 熊本県総合政策局長
熊本大学とは、様々な分野で
連携したい

「地方分権が進むなか、住民のニーズが多様化し、解決困難な課題や専門知識を必要とする地域の課題が増えています。その一方

熊本大学の「総合力」に期待

町における大学院医学薬学研究部の上田厚教授の健康づくりプロジェクトにも参加。このような支援活動は海外にも広がっており、中国・上海市でもヘルスプロモーションを推進。それが高く評価され、今年度はさらに中国の桂林市での健康づくり事業を支援することになった。

健康と研究に国境はない。よりグローバルな地域貢献の可能性が広がっていく。

で、地方の財政基盤は強いとはいえない」。熊本県総合政策局長の鎌水（かまみず）洋氏は、地域の現状をこのように分析したうえで、熊本大学の取り組みへの期待を語る。「産学共同研究による新産業の創出、農林水産業と連携した地域産業の形成、豊かな自然と共生できる環境技術の開発、地域福祉やコミュニティ維持に対応するための行政との共同研究や提言、人材育成など、熊本大学と連携したい課題はいくつもあります。大学の組織的、学際的取り組みによる、総合力“に大いに期待しています”。

こうしたなか、熊本大学は今年八月、熊本県本渡市との間で、行政の全分野にわたって政策研究や人的交流を行う「包括的連携協定」を結んだ。また、政策創造研究センターは、他部局の研究者とともにプロジェクト研究を動かし始めた。これには学内のみならず、他大学や行政機関・民間団体などからも研究者として参加を得ている。

熊本大学はいま、地域のなかで活かされ、地域を活かす、知の拠点としての役割を着実に果たすべく、挑戦している。

平成17年度 政策創造研究センター プロジェクト研究

持続可能な 地域社会形成に関する分野	公平で、効率的な 社会資本の整備にかかる分野	安心で、安全な 地域社会の形成にかかる分野
<p>「山間地の集落機能維持システム構築のための政策研究」</p> <p>山中進 教授 (大学院社会文化研究科) ほか</p> <p>急速な社会経済構造、人口構造の変化に伴う条件不利地域の再構築に向け、持続可能な地域のあり方の提言を行う。</p>	<p>「土木遺産を核とした野外博物館化による街づくりに関する研究」</p> <p>山尾敏孝 教授 (工学部環境システム工学科) ほか</p> <p>熊本県美里町をフィールドに、文化財としての歴史的建築物や土木遺産、準文化財的な構造物や文化的な景観などを調査・評価し、これらを野外展示物とする、歴史と自然が共生する文化ある街づくりを提案する。</p>	<p>「公的病院、消防署の最適配置について」</p> <p>倉津純一 教授 (医学部附属病院長) ほか</p> <p>天草の公的病院、消防署のサービスについて、財政的効率化を図りながら、住民にとって合理的な医療施設と緊急サービス提供施設の最適配置案と運営主体のあり方などを提案する。</p>
<p>「地域資源としての五高記念館の活用整備研究」</p> <p>伊藤重剛 教授 (工学部環境システム工学科) ほか</p> <p>本学の教育、研究、情報発信、学生活動、地域交流の拠点施設、熊本市における博物館的施設など五高記念館を利用する方法について調査研究を行う。</p>	<p>「白川・緑川流域における洪水危機管理システムの構築」</p> <p>大本照憲 教授 (工学部環境システム工学科) ほか</p> <p>超過洪水に対する現行施策の問題点・課題を整理し、洪水ハザードマップの利用実態調査、住民アンケート・ワークショップを踏まえ、白川・緑川流域圏における住民に分かりやすく信頼性の高い洪水危機管理システムの政策提言を行う。</p>	<p>「有明海・八代海の生物生息環境の評価・保全・再生」</p> <p>内野明德 教授 (理学部理学科) ほか</p> <p>生物相の把握という最もオーソドックスな手法を軸に、生物多様性保全のための生物生息環境の評価を行い、ハマグリをモデルに資源管理の確立とブランド化を目指す。また、事業者や地域住民との話し合いを通して、合意形成を行い、環境に調和した防災や事業開発を行うための技術手法を確立する。</p>

● **特別研究** ●

「道州制・政令指定都市に関する研究」

上野真也 助教授
(政策創造研究センター) ほか

道州制導入のあり方や、熊本市がめざす政令指定都市化について研究と政策提言を行う。

● **サイエンスショップ型研究** ●

「坪井川と中心市街地活性化」

畑中寛 コーディネーター
(政策創造研究センター) ほか

大学と市民が協働で地域課題の研究に取り組む。

熊本大学教育学部 助教授 国枝春恵

ゼロから創り出す 芸術の魅力

熊本大学教育学部の国枝春恵助教授は、今年、NHK交響楽団の委嘱作曲家に選ばれました。N響が作曲を委嘱する日本人は毎年一人のみ。今回は、国枝助教授にお話を伺いました。

「合唱団」に囲まれて育った幼少時代

声楽家だったお父さんと同じく声楽家を志すお母さんとの間に生まれ、「土・日ともなれば、父の教え子」が家につばい。「合唱団」に囲まれて育ったようなものです」と言う国枝春恵助教授。4歳の頃、世界的な音楽家を多数輩出している「桐朋学園子どものための音楽教室」に入ります。「当時ピアノを習っていた有賀和子先生は子どもでも手加減なさらさず、厳しいレッスンをなさいました」と国枝助教授。「モーツァルトやバッハ、インヴェンションやシンフォニアの15曲暗譜試験などもありました。でも、シヨパンはもう少し大人になって

からと、なかなか弾かせてもらえませんでした」。弾きたい曲を弾かせてもらえず泣いたこともあるそうです。「でも、どんなに辛くても、何度も何時間も練習しましたよ。それにピアノを弾くのは大好きだったから、ピアノが嫌いになるようなことはありませんでした」。

ゼロから創り出す芸術

小学生の頃には吉田茂首相の追悼テレビ番組でピアノソナタを演奏。その実力は周囲にも認められるようになっていきました。それなのに、国枝助教授が小学校の卒業文集に書いた将来の夢は「作曲家」。「なんでピアノストじゃないの?」。友だちもずい



しなやかな感情表現が国内外で高く評価されている国枝助教授の作品を集めた初のCD

PROFILE

国枝春恵 (くにえだ・はるえ)

1958年東京生まれ。東京芸術大学作曲科、同大学院音楽研究科作曲専攻修了。現・熊本大学教育学部助教授、故・池内友次郎、野田暉行氏ほか、に師事。1982年第33回ヴィオッティ国際音楽コンクール作曲部門特別賞受賞。86年タンクウッド夏期講習に給費研究生として参加。2003年文化庁芸術家特別派遣在外研究員。2005年のNHK交響楽団委嘱作品作曲家。合唱作品も数多くのコンクールや定期演奏会で歌われている。



ぶん驚いたそうです。
 実は、国枝助教授、弾きたいと思う曲をなかなか弾けないピアノの修行中、自分の好きなようにピアノを弾くことができる「作曲」に心惹かれていたようです。そして、ピアノ同様、作曲の才能も幼い頃からその片鱗が見えています。自分で譜面を書いたという6歳の頃の作品「よるのもり」は、美しいメロディーに仕上がっています。



国枝助教授6歳の頃の作品「よるのもり」

自分で反省することもできる」と、作曲の魅力を語ります。

土壇場で生まれる「これだ」と思う作品

「自分の幼少時代の体験から、子どもの興味・関心を引き出して自由に育てる環境と教育方法がとても大切だと思えます。いま私は、学生たちに音楽の基礎を厳しく教えています。一番彼らに望んでいるのは子ども

国枝助教授は「演奏は再現する芸術であり、その瞬間にしか味わえない輝きがあります。他方、作曲はゼロから創り出す芸術です。作品が形として『残る』こともいい。その時は受け入れられなくても、時代を経て価値が

でも、時代を経て価値がでることもありますし、

たちの可能性を見つけ、のばす教育者になって欲しいということ」と語る国枝助教授。

教員養成への意欲もさることながら、自身の創作活動にも情熱を燃やし続け、その活躍の舞台は年々広がっています。昨年は、東京芸大で新作オーケストラのための「レヴェレーション」が初演

されました。また今年6月、NHK交響楽団のコンサート「Music Tomorrow 2005」(東京オペラシティ)で、「ソプラノ・ハーブ・オーケストラのための地上の平和」が初演されました。N響が作品を委嘱する日本人作曲家は毎年一人だけという名誉な出来事です。そんな才能あふれる国枝助教授も、「作曲をする時は、自分の生活がギリギリのところまで追い込まれます。締切間際の睡眠時間は平均3時間くらい。しかし、「きつくても、土壇場までいかないとこれだ

と思えるものがない。だから最後まであきらめない。自分が何かをしようと決めたら、そのイメージに近づくことに全力を挙げるこ



です。全力を出し切って、「あの時、あれができた」という経験があれば、何でもできると思える。強くなれます」。

熊大群像

熊本大学職冒 森保夫

夫婦で習い始めた手話

植木町生涯学習センターの一室。約10人のメンバーが輪になって、手話で会話をしています。皆さんの表情からは笑顔が絶えることはなく、楽しそうな雰囲気が伝わってきます。

「手話が丁寧で分かりやすい」ととても面白くて楽しい方」と、皆からの人望も厚い森さんが中心となり、週に1回行われる「鹿本わかぎ」の例会。ゲームをしたり、思い思いの会話をしたり：聴覚障害者と健聴者が手話での会話を楽しみながら、互いに交流を深めています。

森さんが手話を習い始めたのは約15年前。奥様の米子さんが同じ

感動を伝える手話

「コミュニケーションを大切にしてい

熊本県手話サークル「わかぎ」鹿本グループ(略称・鹿本わかぎ)の会長を務める、森さん。仕事の合間を縫って、手話通訳のボランティア活動をしたり、九州各地で開かれる手話の研修会や交流会に出席したりと、忙しい中にも手話を通じたコミュニケーションに充実した日々を過ごしています。

職場の聴覚障害者ともっとコミュニケーションがとれればと見始めたテレビの手話講座を、森さんも一緒に見るようになったのがきっかけでした。その後、夫婦そろって地元の植木町で開かれた手話の講習会に参加。2、3年通い、手話の基礎を身に付けた後、「鹿本わかぎ」に入会しました。現在も、「鹿本わかぎ」の例会に参加する時は、米子さんと一緒にです。

ろうあ者の声を社会へ

この「鹿本わかぎ」の集いが、皆が楽しく本音で語り合える憩いの場になってほしい、と語る森さん。「聴覚障害者の方にも、ここに来れ



PROFILE

森 保夫 (もり・やすお)

熊本県鹿央町(現山鹿市)生まれ。植木町在住。熊本大学自然科学系事務部大学院教務企画係長。「鹿本わかぎ」会長、「県わかぎ」副会長。九州手話サークル連絡協議会熊本県選出理事。

県わかぎ連絡先：熊本聴覚障害者総合福祉センター (096-383-5587)



鹿本わかぎの定例会風景

ば仲間がいると思ってもらえればうれしい。ただ交流を深めるだけでなく、障害者の方の思いや考えを聞き、社会に伝えることも大事。社会参加への橋渡し役になればと思います。また、聴覚障害者にとって他人事ではない問題に直面することも。「障害者自立支援法案が制定されるとサービスが有料化され、障害が重ければ重いほど障害者の自己負担が増えるとも考えられるんです。こういった問題も皆で勉強していきます」。

山鹿・植木地区の手話奉仕員派遣の窓口である森さんは、自らも手話通訳のボランティアとして活動中。依頼の内容は、子どもの入学式や授業参観、旅行といった個人の依頼から、国体などのスポーツ大会や講演会といった行政や各種団体の依頼まで、さまざまです。

感動を伝えるのが目標

手話通訳をする時は、率直に伝えることをいつも心がけているという森さん。手の動きだけと思われがちな手話ですが、顔の表情や体の動き、動作の大きさなどによって、意味が大きく違ってくるのだそうです。

「実は、僕は正式な手話通訳の資格を持っていないので、通訳の依頼を受けるには制限があります。どんな依頼でも責任の重さは同じだと思っています。目標は、感動を伝えること。例えば、お子さんの卒業式にしても、その方の家族にとっては一生の思い出となる大切な出来事。感動的な場の雰囲気や、少しでも多く聴覚障害者の方に伝えられるようになりたいですね」。

最も大切なのは、人と人のコミニケーション。その一つの手段が手話なのです。

こんにちは

人差し指と中指をそろえて顔の中央に立てたままおじぎをする

ありがとう

片手でもう一方の手の甲の上をたたく

ごめんなさい

親指と人差し指でつくった円を額にあてた後、開きながら前に倒す

卒業生

を訪ねて リバテープ製薬株式会社 技術開発部 戸畑温子さん

大学時代に培ったチャレンジ精神で 新製品の開発を実現

入社2年目の平成13年に、新製品の化粧品の開発を任された戸畑さん。熊本大学工学部の伊原研究室と熊本県工業技術センターとの共同開発に着手し、平成14・15年度「地域新生コンソーシアム補助事業」にて開発。試行錯誤を重ねながら今年5月に発売された新製品には、戸畑さんの思いが、ぎっしり詰まっています。

”ものづくり”への 思いがカタチに

高校生の頃から、化学には興味がありましたね。友人に誘われて、クラブ活動も化学クラブに所属していました。「ものづくりがしたい」という漠然とした思いは、この頃からあつたと思います。だから、大学も理学部ではなく工学部を選びました。

大学時代に肌が荒れたことがあつて、使っていた化粧品の成分欄を見たら界面活性剤など化学物質が使われていたんです。化粧品へ興味が出てきたのはこの頃だと思えます。そして、大学院時代に選んだ研究テーマは、化粧品の保湿剤として使われるヒア

ルロン酸について。化粧品を扱う会社に入りたいと明確に思うようになりました。弊社のような中小企業を選んだのは、一つの製品づくりに、一から十まで全て関わられるから。大企業では、研究だけとか、役割が分担されていますので。

入社後は、主に化粧品の新製品づくりに取り組んできました。そうして、今年5月に発売にこぎつけました。

私が今、使いたい商品を作る

この化粧水の発売にあたって、商品の開発からパッケージのデザインやネーミングなど、「ものづくり」に関しては全て関わらせてもらいました。

高校生の頃からずっと乾燥肌だったのですが、28歳ごろから急にベタつくようになって。これがいわゆる「お肌の曲がり角」なのかなあって(笑)。だから、とにかく今自分が使いたいと思う化粧品を作りました。実は、販売価格などはあまり考えずに作ってしまったので、インターネットでの限定販売なんです(笑)。この化粧水は、新しい保湿剤「モイスセル」を配合しているのが特徴。少し専門的な話になりますが、植物などの主成分であるセロロースを球状に加工し、保湿成分を導入することで、しっとり感とさらさら感の両方を実現しました。実際、私も毎日使っていますが、悩みの種だったベタつきが解消され、肌の調子が

PROFILE

戸畑 温子 (とばた・はるこ)

鹿児島県種子島生まれ。熊本大学工学部応用化学科を経て、2000年に熊本大学大学院自然科学研究科物質・生命化学博士前期課程修了。同年にリバテープ製薬株式会社入社。現在、入社6年目。





良くなった気がしています。

研究から開発、発売まで約3年間。一番苦労したのは、保湿剤「モイスセル」を製品化する時。保湿力は高めたけれど、保湿剤を多量に使うとベタついてしまうので、そのバランスが難しかったですね。

まだ発売から数カ月ですので、目に見えた反応はこれからですが、やはりお客様に商品をリピートしていただいた時が一番うれしい。

お客様の要望もあり、今年10月1

日には同じシリーズで、ウォッシュングフォームと、モイスチャークリーム

の2つの商品を発売しました。

私が今、こうして新商品の開発に携わっているのは、大学4年生から大学院時代の3年間、研究室でお世話

になった、伊原博隆教授の影響が大きいと思います。伊原先生は、まず学生にテーマを与えて、とりあえず自分でやってみなさいという感じで、自分がどうしたいのかを考えさせて、学生の自主性をとても大切にしてください。もちろん、困ったり迷ったりした時は気軽に相談に乗って助けてくださいます。そんな中で、どちらかといえば前は引込み思案だった私が、自分から新しいことにチャレンジしていくようになったのかもしれない。先生には、この商品の開発時にもお世話になりましたし、今も新しい素材が見つかったら提案していただくなど、親しくさせていただいています。

開発員が少ないので、いろんな仕事を一人でやらなければならぬのは大変だなと思う時もありますが、逆に面白い部分でもあります。今後は、化粧品に限らず、いい素材があったらいろいろな製品づくりにチャレンジしてみたいですね。弊社はもとと医薬品メーカーですので、医療用品や医薬品の開発にも取り組んでみたいと思っています。



リバテープ製薬株式会社(熊本県植木町)

昭和35年、国内で初めて救急絆創膏(現在のリバテープ)の開発に成功したメーカー。医薬品のほか、医療器具、医薬部外品、化粧品を製造販売。社員数170名。
http://www.libatape.co.jp



戸畑さんが開発したレフリーシリーズの化粧品

「世界の頂点」と築いた パートナーシップ

熊本大学生命資源研究・支援センターは、日本を代表する「遺伝子改変マウス」の管理機関として世界にその名を知られています。そこに至るには、遺伝子学研究マウスの「世界の総本山」であるアメリカのジャクソン研究所との国際交流も、大きな役割を果たしました。今回は、同センターとジャクソン研究所との協定の歩みを中心に紹介します。



遺伝学研究と遺伝子改変マウスの世界的な拠点であるジャクソン研究所には、世界中から多くの研究者が集まる。中潟教授はここで、自身が開発したマウスの精子や受精卵の凍結技術を多くの人に伝授。その実力が認められた

「世界の総本山」に乗り込む

2004年6月、中潟直己教授は、ニューヨークのJ・F・K空港に降り立ちました。そこからボストンを経由してジャクソン研究所のあるメーン州バー・ハーバーの町へ。中潟教授にとって、ジャクソン研究所はもう幾度となく訪れた場所。しかしこの時は、10月までの5か月間同研究所の客員研究員として滞在する間に、3つの目的を達成する意欲に燃えていました。

第一に、生命資源研究・支援センターとジャクソン研究所との部局間学術交流協定の締結。第二に、すでに中潟教授によって作成されていた

日本語版「マウス生殖工学技術（凍結したマウスの受精卵や精子から産子作出する技術）」の解説CD-ROMの英語版作成。第三に、中潟教授が開発したマウスの受精卵および精子の凍結技術を、ジャクソン研究所へ伝授することでした。

「意気込みは大きかったです。世界の総本山に『乗り込んで行く』気持ちでした」と中潟教授は当時を振り返ります。

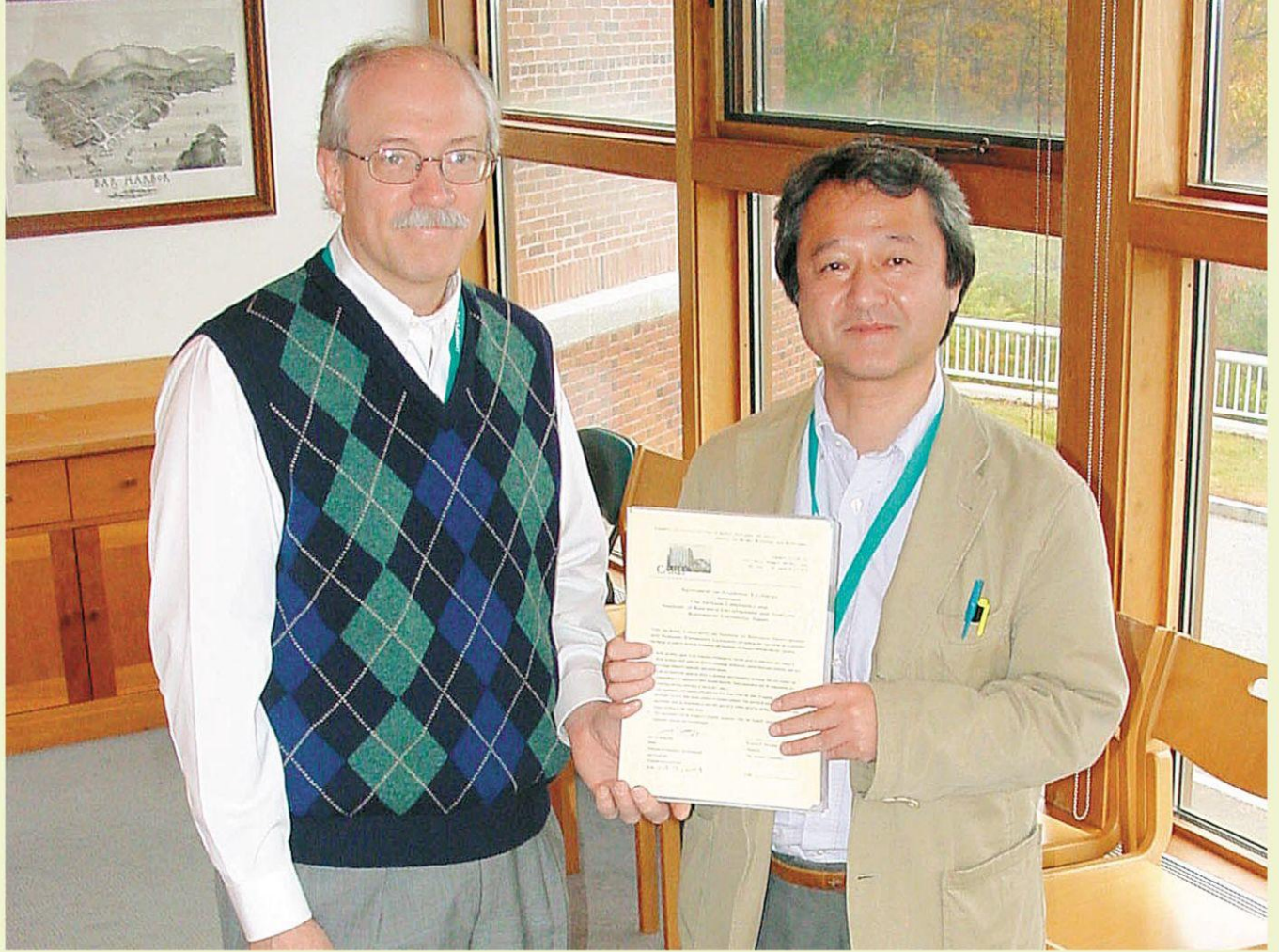
対等な関係を築く

1929年に設立されたジャクソン研究所が、現在保存するマウスの種類は遺伝子改変マウスも含め2300系統。歴史や規模において世界

一です。しかし、マウスの受精卵および精子の凍結技術については、中潟教授が開発した方法がジャクソン研究所のそれよりも優れていました。現在世界中で採用されている受精卵の凍結技術の75%、精子の凍結技術の100%が「Nakagata Method（中潟式）」、つまり中潟教授の開発した技術です。

「ジャクソン研究所には世界中の研究者が訪れます。その中には、僕を見て『なんか東洋人がいるなあ』という程度の目で見える人もいました。でも、『マウス生殖工学技術』のCDを渡して僕の名前を知るでしょう。Nakagata・・・あのNakagataか！と解ってもらえる。初めて、顔

※1
そのマウスが本来持っていない病気の遺伝子を導入したり、逆に本来持っている遺伝子を破壊したりして人工的に作りあげた研究用のマウス。ヒトの疾患の原因や治療方法を探るために欠かせない生命資源



中潟教授とWoychikジャクソン研究所所長。生命資源研究・支援センターは、北京大学、広東省医学実験動物センター、上海実験動物センターとも部局間協定を締結している

と名前が一致するというわけです。教授は、ジャクソン研究所で簡易ガラス化法によるマウス胚の凍結保存の技術指導や講習会などを開催。世界一を誇るジャクソン研究所と生命資源研究・支援センターとの「対等な関係」を構築していったのです。「ジャクソン研究所で研究させてもらうばかりでなく、こちらの技術も提供し、ギブアンドテイクの関係を確立して初めて、部局間協定の話はスムーズに進む。協定のことは、滞在終了間際まで持ち出すことはしませんでした」。

そして、アジアの拠点に

2004年10月26日、生命資源研究・支援センターとジャクソン研究所との部局間協定が締結されました。生命資源研究・支援センター長の佐谷秀行教授は、「協定は、中潟教授の活躍抜きには語れない。彼を送り込み、ジャクソン研究所の信頼を得たことが対等な立場での協定締結につながったのです」と中潟教授の功績をたたえます。

協定締結により、双方の研究交流が密になり、ジャクソン研究所から遺伝子改変マウスの胚や精子を受け取るのに、難しい制約がなくなりました。研究所滞在中に完成した「マウス生殖工学技術」CDの英語版も、

ジャクソン研究所および世界各国の研究者に利用され、中潟教授の技術が世界のスタンダードになりつつあります。そして、世界にあるマウス・バイオリソースの18機関の中に、「熊本大学」の名が並ぶに至ったのです。「次はアジアです」と、佐谷教授も中潟教授も口をそろえます。「マウス・バイオリソースにおけるアジアのコンソーシアムを組み、アジアの研究が、アジアで拡大するよう」、北京大学での「マウス生殖工学技術」講習会の開催、上海動物実験センターから客員教授の受け入れなど、アジアでの核作りに着手。生命資源研究・支援センターの国際交流の推進は、現代医療の大いなる飛躍につながるものと期待されます。



「疾患モデルマウスで、世界中の研究者の支援をする。それが私たちの仕事」と語る熊本大学生命資源研究・支援センター長の佐谷秀行教授

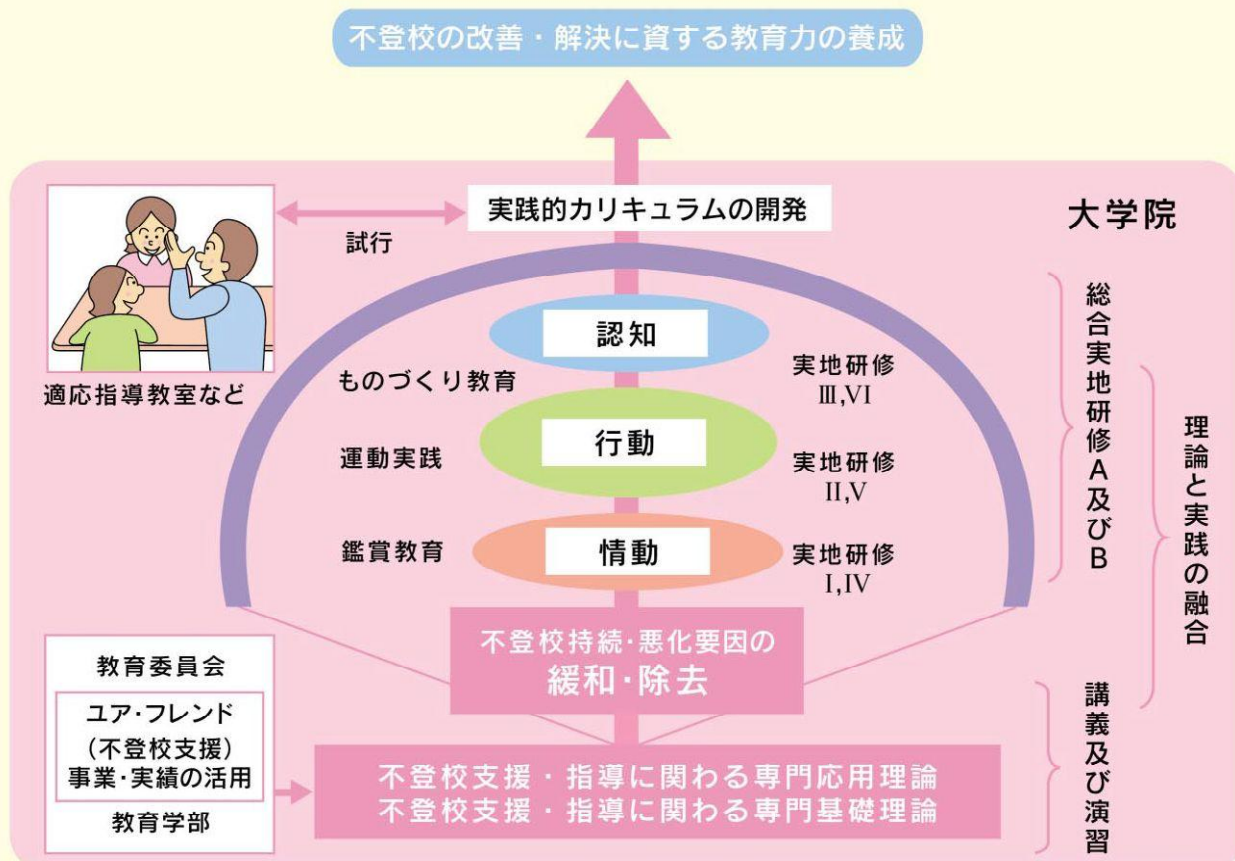
本学の不登校問題解決のためのプロジェクトが、文部科学省の推進プログラムに選定されました

文部科学省は「平成17年度大学・大学院における教員養成推進プログラム」に、全国の大学などから申請された101件の中から34件を選定。本学の教育プロジェクト「不登校の改善・解決に資する教育力の養成－大学院教育における系統的カリキュラムの創出と試行実戦－」がその1つに選ばれました。

不登校の要因は「家庭生活」「学校生活」「社会環境」及び「本人の問題」など、近年複雑・多様化すると共に、それらの要因がさらに複合化する傾向があり、その解決はますます困難になっています。この課題の解決に資する教員としての資質能力の育成は、教員養成系の大学・大学院における極めて重要な使命であり、また、学校教育関係者・保護者などからも囑望されています。

本プロジェクトは、不登校の持続要因に対して、不登校児童生徒の「情動」「行動」「認知」の三側面からアプローチする大学院教育における実地研修授業プログラムを作成・提起。不登校支援並びに不登校予知・予防に関わる基礎理論・応用理論を構築し、不登校の改善・解決に資する系統的カリキュラムを創出すると共に、本学がこれまで取り組んできた不登校支援活動の実績を基盤とし、熊本県内各地域における適応指導教室や教育現場などにおける実践事例を通して、教員としての資質能力の育成を図るものです(下図参照)。

大学院教育における不登校支援カリキュラム構想



熊本大学オン・エア

放送公開講座(ラジオ講座)

熊本大学のさまざまな研究活動によって生み出された専門の知識を「面白く、ためになる」情報として、みなさまに分かりやすくお届けします。今回のテーマは「時代を読み解く」です。

RKKラジオ 火曜
18:45~19:00

2005年10月4日~2006年3月28日

シリーズ① 「医学の最新トピックス」

- ①平成17年10月4日 「免疫とからだの防御機構」 (医学薬学研究部 阪口薫雄教授)
- ②平成17年10月11日 「エイズは撲滅できるか?」 (医学薬学研究部 原田信志教授)
- ③平成17年10月18日 「心臓病治療の最前線」 (医学薬学研究部 小川久雄教授)
- ④平成17年10月25日 「病態を分子で解く」 (医学薬学研究部 佐谷秀行教授)
- ⑤平成17年11月1日 「小児の慢性疲労症候群」 (医学薬学研究部 三池輝久教授)

シリーズ② 「変化の時代を読み解く」

- ①平成17年11月8日 「地方分権と地域行政」 (法曹養成研究科 中川義朗教授)
- ②平成17年11月15日 「裁判員制度とは」 (法学部 稲田隆司教授)
- ③平成17年11月22日 「今なぜ憲法論議」 (法学部 大江正昭助教授)
- ④平成17年11月29日 「三位一体の改革とは」 (法学部 山下勉教授)
- ⑤平成17年12月6日 「自動車リサイクル法で何が変わる」 (法学部 外川健一教授)

シリーズ③ 「日々の健康を支えるために」

- ①平成17年12月13日 「食べ物、薬の効き目を左右するか?」 (薬学部 今井輝子客員教授)
- ②平成17年12月20日 「食べ物、薬の効き目を左右するか?」 (薬学部 今井輝子客員教授)
- ③平成17年12月27日 「熊本大学薬用植物園」 (薬学教育部附属薬用植物園長 矢原正治助教授)
- ④平成18年1月10日 「熊本大学薬用植物園」 (薬学教育部附属薬用植物園長 矢原正治助教授)
- ⑤平成18年1月17日 「身のまわりの病原微生物」 (医学薬学研究部 鈴木啓太郎助教授)
- ⑥平成18年1月24日 「保健学科が目指す人材育成」 (医学部保健学科 森田敏子教授)
- ⑦平成18年1月31日 「家族と自分のこころの健康」 (医学部保健学科 宇佐美しおり教授)
- ⑧平成18年2月7日 「母子看護学から見た子どもの虐待発生」 (医学部保健学科 宮里邦子教授)
- ⑨平成18年2月14日 「PET癌検診」 (医学部保健学科 富口静二教授)
- ⑩平成18年2月21日 「室内空気質と健康」 (医学部保健学科 原田幸一教授)

シリーズ④ 「時代が求めるリサイクル~その技術展開の世界」

- ①平成18年2月28日 「廃水の再生技術」 (工学部 古川憲治教授)
- ②平成18年3月7日 「バイオマスのリサイクル」 (工学部 木田建次教授)
- ③平成18年3月14日 「再生可能エネルギーの活用」 (工学部 石原 修教授)
- ④平成18年3月21日 「スラグとダストの有効利用」 (自然科学研究科 河原正泰教授)
- ⑤平成18年3月28日 「リサイクル建設資材・技術」 (工学部 三井宜之教授)

熊本大学 生涯学習教育研究センター

<http://www.lifelong.kumamoto-u.ac.jp/>

ご意見・ご感想は下記まで

熊本大学
総務部総務課地域共生戦略室
TEL.096-342-3121 FAX.096-342-3110
E-mail:sos-tiiki@jimu.kumamoto-u.ac.jp



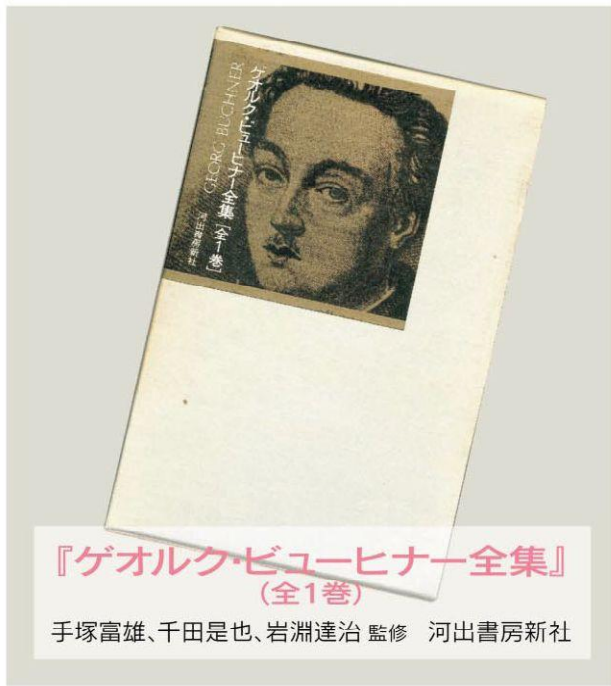
法学部教授
森 光昭

Vol.10 Book
お薦め
の一冊

ゲオルク・ビューヒナー(Georg Buchner 1813-1837)は日本ではあまり知られていないが、ドイツでは、その名を冠したビューヒナー賞が最も権威ある文学賞となっている。

医学生として7月革命後のフランスに留学し、自由を呼吸して帰国したビューヒナーは、故郷で革命運動を起こすが、失敗し、1835年初頭、国外逃亡を余儀なくされる。亡命先のシュトラースブルクで解剖学や哲学、創作に没頭する。1年半後、チューリッヒ大学の解剖学の講師となり、輝かしい未来が見え始めた矢先、チフスに罹り、23歳で夭折した。

全集にはビューヒナーの全作品が訳出されているが、まず『ダントンの死』から読み始めることを薦めたい。これは、ビューヒナーが逃亡前、逮捕の危険に直面しながら、逃亡資金を稼ぐために一気に書きあげた戯曲である。ダントンやロベスピエールなど革命の大立者をさまざまな角度から徹底的に照らし出し、生きた歴史に肉薄する。革命賛美でも反革命でもない。自由と平等は、個と全体は、いかにあるべきか、人間の幸福とは何か。時空を超えて、この戯曲は、現代の我々にも鋭く働きかけてくる。「お薦めの一冊」とする所以ゆえである。



熊本
新哲学の道



また、川尻は今も桶などの木工や竹細工、川尻刃物、和菓子(六菓匠)などの職人文化が健在で、くまもと工芸会館はその中核です。町を歩けば、「瑞鷹」の酒蔵や酒蔵資料館などの白壁や格子戸の古い町並みが、郷愁を誘います。西南戦争の西郷隆盛の本陣跡や薩軍墓地跡、それに近くには古刹大慈禅寺もあります。毎年八月十五日、川面を染める精霊流しも思いが深く、川尻は伝統がひっそりと息づく町です。古くて静かな町ですが、最近では景観保存や加勢川利活用など、町おこし運動が始まり、活気づいています。また、江戸時代からの鰻屋や蕎麦屋など、グルメの町でもあります。一度ゆっくりと歴史散歩にお出かけください。

(法学部教授 岩岡中正)

川尻―歴史の町散歩

熊本市南部の川尻は、江戸時代には町奉行が置かれた古い町です。緑川支流の加勢川の河口にあつて、上流から米や木材が集まる川港で、藩の商業の中心の一つとして栄えました。当時は、藩の水軍御船手川おふなごや造船所(作事所)があり、年貢米を収める御蔵や長い石組みの御蔵前の船着場などは今も残っています。



熱い想いを カタチにする



あくことのない、好奇心。
真理をもとめる、探究心。
夢はここで命を吹き込まれ、志はここで明日をつくる。
わたしたちは、熊本大学です。

火になる人、 幹になる人へ

熊本大学

<http://www.kumamoto-u.ac.jp/>